



とある博士と 愉快的な仲間たち



ておまさお

ある日博士の研究所に、全身黒装束に身をつつんだ数人の男たちがやってきた。

「何か御用かね？」

「私たちはこういうものです」

男たちのリーダーらしき男は、懐から取り出した手帳から名刺を抜き取ると博士に差し出した。

「……ん？」

「政府の者です。博士も御存知のように、現在我が国は某国の独裁者によって核攻撃の脅威にさらされております。政府としましては、このままにしておくわけにはいきません」

「ワタシに何をしろと？」

突然の予期せぬ訪問者に困惑しながらも、博士は毅然とした態度で男たちに対峙していた。「博士の研究されている薬を、是非とも我が国の平和のために使わせていただけないでしょうか」

「あの薬のことか？ あんなのでよければいくらでもやるぞ」

「御協力ありがとうございます！」

男は先ほどとはうってかわって満面の笑みを浮かべ、博士の掌を握りしめた。

「本当にこんなのでいいのか？」

「我々のリサーチの結果、博士の薬がいちばん強力であることが判明しております」

「ワタシの研究が、平和のために使われるとは光栄なことだな」

そして、数ヶ月後。

「博士！ たいへんです。起きてください」

「……何事だ？」

徹夜明けの博士が仮眠をとっていると、助手が大声を挙げながら研究室に入ってきた。

「クーデターです！ 某国の独裁者が部下たちによって権力を奪われました」

「いったい何が起こったのだろう？」

「それが……病気がちだった独裁者がある薬を処方されたところ、政治もそっちのけで毎晩風俗店に入り浸るようになったため、部下たちから愛想をつかれたらしいです」

「毎晩とは精がでるな。……ん？ ひょっとして、その薬って??」

今日は休日にもかかわらず、博士の研究所の呼び鈴がけたたましく鳴り響いた。

「何の御用ですか？」

「博士！ これはどういうことですか」

徹夜明けの博士が寝ぼけまなこで玄関の扉を開けると、小柄な中年の男性が立ちつくしていた。彼の手には何やら見覚えのあるものが……。

「それは、先日お渡しした薬品ですね」

「好きな夢が見られるというので、毎晩飲んでから寝ているのに、いっこうに見たい夢なんて見られないではないですか」

「いったいどんな夢を見てしまうのですか？」

「女房ですよ！ 夢の中にまで出てきてあれこれ干渉しやがるんです」

研究所の応接室に客人を通して、お茶を淹れながら話を聞いていた博士だったが、彼の怒る理由もわからないでもなかった。

恐妻家でもある博士にとって、夢の中まで夫人が出てくるなんて他人事ではない。

「薬はいつ飲まれていますか？」

「寝る直前です。枕元に水と薬を用意して、飲んでからすぐ寝るようにしています」

「おかしいですね。それで、目を瞑って思い描いた情景がそのまま夢となってあらわれるはずなのですが……」

博士は原因がわからなかった。配合を間違えたわけではない、実際に博士も服用して自ら臨床試験をしているのだから。

悩み抜いた博士にある疑問点が浮かび上がった。

「もしかして、奥様とは同じ寝室では？」

「ええ。仕方ないんですよ、我が家は狭いんですから。寝室を分けるなんて無理なんです」

「ああ、わかりましたよ。薬を飲む前に奥様と顔を合わせてしまうと、飲んでからでもその残像が消えないのです。なるべく服用十分前には奥様に会わないようにして下さい」

「そ、そんな……」

いつもは明るく元気な助手なのだけれど、今日はなんだか様子がおかしい。

「どうした？ 何か悩みでもあるのか」

「ええ。実は、これから合コンに参加するのですが……」

助手は極度のあがり症で、特に女性の前では何を言っているのかわからなくなり、これまで何度も合コンに失敗しているという。

「よし、君はこの薬を飲むとよいだろう」

博士は引き出しからとある錠剤を取り出した。

「これは？」

「この薬を飲めば、どんなところでもあがることなどまったく心配ない。言いたいこともちゃんと言えるぞ」

「それって、怪しい薬なんじゃないですか」

「ワタシも講演や学会のときなどは、かならずこれを飲んでおる。効果はワタシが保証しよう」

「では、ありがたく使わせていただきます！」

助手は薬を手に、意気揚々と合コン会場へと向かった。

そして、翌日。

「博士！ ありがとうございます」

「おお。合コンはうまくいったようだな」

「うまくいったものにも、あまりにあの薬が効くものだから女の子たちにも飲ませてみたんですよ」

「ほほう。それでどうした？」

「女の子たちも饒舌になりまして、次々に本音を話し出したんです。すると、とんでもない話が出てくる出てくる。危うく騙されるところでしたよ。女って怖いですね」

「先生！ 聞いてください」

いつもは清楚で物静かな秘書が、険しい表情を浮かべて博士のもとにやってきた。

「彼氏ったら、酷いんです！ あたしがいながら、もう一人彼女がいたんですよ！！」

「まあ、落ち着きなさい。二股をかけられていたということかね？」

「はい。昨日、彼の部屋に行ったところ、そこに見知らぬ女がいたんです！ しかも、二人とも素っ裸で抱き合っていたんですよ！！ ああ、ムカつく」

秘書は興奮冷めやらぬ様子で、博士の飲もうとしていたお茶を取り上げ一気に流しこんだ。

「それでどうしたのだ？」

「ムカついたから、女を彼氏から引き離して、近くにあったハサミでズタズタにしてやったんです！」

「そ、それは……」

博士の脳裏には、血糊のべったりついたハサミを持ち、返り血を浴びて仁王立ちしている秘書の姿が浮かんでいた。

「そうしたら彼氏が何て言ったと思います？」

「何て言うもなにも……」

「『それ、高かったんだぞ』ですって！ あいつ、自分が何をしでかしたのか、ちっともわかってないんです」

「えっ？ それって、もしかして……」

「先生、クリスマスはいかがでしたか？」

「ああ……楽しかったよ」

秘書の質問に対して、博士はやけに歯切れが悪かった。それもそのはず。イヴの夜だということに帰宅が遅くなった博士は、夫人に大目玉を喰らっていたのだ。

「君はどうなんだね？ 彼氏と一緒にだったんだろう」

「もちろんですとも。彼ったら、フレンチの三ツ星レストランを予約していて、クリスマス限定の特別フルコースを御馳走してくれたんです。そこで、前から欲しかったブランドのピアスをプレゼントされて、もう最高の夜でした」

秘書の顔は瞬く間に紅潮して、瞳は輝きっぱなしだった。さぞかし熱い夜を過ごしたのだろう。スケベ心に火がついた博士は、思わず口が滑ってしまった。

「それなら、ホテルもさぞかし高級なところだったんだろうな」

「それが……」

ここで秘書の顔色が一変する。これはまずいことを聞いてしまったようだ。慌てた博士は、必死に話題を変えようとしたのだが……。

「彼、急に仕事が入ったらしく、食事中に携帯が鳴って、食べ終わったらすぐに会社に行っちゃったんです……」

「それは気の毒だったな。だいぶ景気も回復しているし、仕方がないだろう」

すると、二人の会話を聞いていた助手がとんでもないことを口走った。

「それって、次の彼女のところに……」

助手が言い終わる前に、危険を察した博士は、軽く咳払いをしてから助手を睨みつけるのだった。

新年会

研究所では、年末年始も通常通り研究が行われているのだが、今日はどういうわけか助手の顔色が芳しくない。

「どうした？ 具合でも悪いのか」

「それが……このところ忘年会が続いておりまして、ずっと二日酔いなのです。しかも、今夜はこれから新年会でして」

博士もアルコール類には強い体質ではないけれども、年末年始ともなれば酒席に誘われる回数は目に見えて増えていた。それなのに、博士は二日酔いとは無縁のようである。

「ワタシはこれを飲んでおる。これを飲んだあとなら、悪酔いはせんぞ」

「胃薬ですか？ それならボクも飲んでいますが……」

博士が懐から取り出した錠剤は、たしかに胃薬のようにもみえる。しかし、その正体は画期的なものであった。

「これを飲んだあとならば、ビールでもワインでも、すべて自分の好みの飲み物と同じ味になるのだよ。たとえば、水を飲んだとしてもブランデーが飲みたいと思えばブランデーの味になる。

その逆もしかりだ。ワタシはいつも大好きなクリームソーダの味を思い浮かべておる」

「本当ですか！ それならば二日酔いになる心配はありませんね」

そう言うと、助手は数粒の錠剤をポケットに忍ばせ新年会の会場へ向かうのだった。

そして、翌日。

「あっ、すみません。ちょっと失礼します」

「またか……これで五回目だぞ。こんな頻繁にトイレに行かれては研究にならん。いくらアルコールではなくなったからとはいえ、腹を壊すほど飲んで意味がないではないか」

今日は成人の日。

なぜか秘書が何度もため息をついていて、いかにも憂鬱そうである。

「どうした？ 悩みでもあるのか」

博士はたまらず声をかけてみた。

「違うんです。二十歳の頃はよかったなと……。あたしも振袖姿の初々しいときがあったんですよ」

そんなことだろうとは思ったけれど、博士も素早く話を切り返してみた。

「何を言っておる。ワタシなんて何十年前になると思っておるのだ。キミなんてまだ、せいぜい七、八年前だろう？」

そう言ったあとに博士は焦った。考えてみれば、秘書の年齢を把握していないことに気づいたのだ。これはまた余計なことを言ってしまったと思ったのも後の祭り……。

「先生！ 失礼じゃないですか！！ あたし、まだ二十六ですから」

やはり博士の記憶は曖昧であった。彼女が大学を卒業して、この研究所に秘書としてやってきてから今年で三年目だったか、四年目だったか……。しかも、大学は一浪していると聞いた記憶もあったからだ。

「す、すまん……い、いいじゃないか、一歳くらい間違っても……」

「女性にとって、特に二十代の一年って大きいんですよ！ 先生みたいに五十代になればそうでもないでしょうけれど」

二十代に限らず、女性の年齢を間違えることは致命傷だ。博士もこれまで、何度夫人の年齢を間違えて痛い目に合っていることか……。

「御言葉を返すようだけれど、ワタシはまだ四十代なのだが……」

「どっちでもいいじゃないですか！」

秘書の怒りは、しばらく治まりそうにない。

博士には頼りがいのある優秀な助手が何名かいるのだけれど、最近そのうちの一人がどうも元気がないようである。

「どうした？ 昨日も遅かったからな、だいぶ疲れておるんじゃないか」

「いや、違うんです。このところ倦怠期なのか、妻とは喧嘩ばかりしていて、とことん困り果てています」

「喧嘩するほど仲がいいとは言うけれども……そうだ、この薬を使ってみるといい」

博士はふと思立って、数粒の錠剤の入った瓶を助手に差し出した。

「これは？」

「この薬を飲むと、目の前にいる異性が、自分の理想の人に見えるのだよ。ワタシと妻も結婚して二十五年になるが、ずっと円満なのはこの薬のおかげなのだ」

「つまり、博士はこの薬を飲むと、奥様が理想の女性に見えると？ もしかして、博士の好きな松嶋菜々子に見えるということですか」

「そのとおりだ。あまり飲み過ぎると、現実とのギャップに悩まされることにもなるがな……」

「ありがたく使わせていただきます！」

助手は薬を受け取ると、大事そうに懐にしまうのだった。

そして、数日後。

「どうした？ いっこうに顔色が良くなるようだが」

「はい。あの薬を妻に飲ませてみたところ、妻にはボクが福山雅治に見えるらしく、おかげで毎晩迫られるようになりまして、もう体力の限界なのです……」

インフルエンザの功罪

博士は朝からイライラしていた。どうしても本日中に完成させなくてはいけないというのに、いつまでたっても助手が現れないのだ。

「どうした？ とっくに時間は過ぎておるぞ」

いたたまれなくなった博士が助手に電話をしたところ、受話器の向こうから聞こえてきた声はやけに元気がなかった。

「あの……申し訳ございません。インフルエンザにかかってしまいました」

「なんということだ！ 君がいないと今日中の完成もおぼつかないではないか。どうすればよいものか……」

博士は途方にくれるしかなかった。クライアントには、すでに一ヶ月以上も待ってもらっているというのに、これ以上納期を遅らせれば完全に信用をなくしてしまう。

すると、受話器の向こうの助手が思ってもみないことを口走った。

「博士、こんなこともあろうかとボクの代わりを用意しておきました」

「……代わりとは？」

「ボクとほぼ同じ働きをするロボットです。ボクのコピーみたいなものですね」

「いつの間にこんなものを……」

助手に言われたとおりに、研究室の隅にある大きな段ボール箱を開けると、そこには人型のロボットが横たわっていた。

助手の説明どおりに起動させてみると、想像していたよりも動きもスムーズだし、博士の知りたい情報もすべてインプットされているようだ。

「これでどうにかなるかもしれない」

それから数時間後。

「博士、ロボットはどうでしょうか？ 真面目に働いていますか」

心配になった助手は、いてもたってもいられず博士に電話で尋ねてみた。

「おかげさまで順調だよ。このままならもう少しで完成だ。ああ、君はあと一週間、いや、あと一ヶ月でもいい、心配せずにゆっくり休みたまえ」

「警部、容疑者はなかなか白状しませんね」

「うむ。どう考えてもあいつがやったとしか思えんのだが、証拠はないし、このままでは起訴できんな……」

二人は取調室の外で途方に暮れていた。指名手配されていた連続窃盗犯を検挙したものの、すでに一週間も黙秘を続けていたからだ。

「やはりあれを使うしかないか」

「こうなったら仕方ないですね……」

二人の意見は一致した。刑事事件では使用が制限されている、とある薬を容疑者に内緒で飲ませることにしたのだ。

この薬を飲めば、隠している真実はすべて話したくなるのだけれども、警察の威信にかかわるため使用は必要最小限にするよう通達されていた。

そして数時間後。

「警部！ やりました。容疑者は犯行を認めましたよ。これで起訴できます……って、あれ??」

「警部、どうしました？」

「見てのとおりだ。つい、あいつに飲ませた薬入りのお茶を口にしちゃってな……。こないだの通勤電車の痴漢行為を自供しちまったんだよ」

そんな警部の両腕には、銀色に輝く手錠が嵌められていた。